シンポジウムの企画主旨

京都大学理学研究科 村 上 興 正

KEY NOTE SPEECH OF A SYMPOSIUM ON "OBJECTIVES AND SIGNIFICANCE OF RED DATA BOOKS"

Okimasa MURAKAMI *Graduate School of Science, Kyoto University*

今回のシンポジウムの企画には，実は少し不純な動機があった。というのは，平成11年以来，関西自然保護機構は京都府の委託を受けて，京都府のレッドデータブックの作成をしつつあり，平成13年度末には成果を発表する必要があった。この作成には，関西自然保護機構の会員のみならず，かなり多数の研究者が参加しており，その成果が問われる所である。とくに，問題となるのは，京都府のレッドデータブックの特徴は何か，何が売り物か，京都府の絶滅のおそれの基準はどのようにするのか，実際にそれに対応する資料はあるのか，できあがったものはどのように活用されるのかなど，重要な問題に関する論議がまだ未成熟であったからである。

私，山岸理事長，および布谷事務局長が中心となって，全体の骨子および演者を次のようにした。まず，地方版レッドデータブックは全国版とどのように違い，その存在意義は何かについて，そのどちらにも深く係わっている松井さん，それにレッドデータブックを最も活用する立場にある梅原さんに講演していただくことにした。また，現在全国で地方版レッドデータブックが作成されると共に，全国版レッドデータブックの改正が行われつつあるので，これを環境省の植田さんに紹介していただくことにした。絶滅のおそれの基準については，植物の全国版を作成し，その面で造詣が深い矢原さん，もっとも資料が多い鳥で，実際に京都府で絶滅のおそれを具体化して取り組みを行っている江崎さん，それに実際に滋賀県でレッドデータブックの計画から作成まで取り組んでこられた松本さんに問題点や苦労した点などを講演していただくことにした。

シンポジウムは平成12年6月25日の日曜日に京都大学理学部2号館120号室で行われた。午前10時の予定時刻に始まった千地会長の挨拶の後，布谷事務局長が座長となって午前の部の3講演が行われた。12時から午後1時までの昼食を挟んで，午後の部は山岸理事長の座長の下，3講演が行われた。午後3時から4時までの総合討論では，山岸理事長，布谷事務局長，および村上が座長の任にあたったが，議論が白熱した。

講演及び討論の内容は，演者の手による6論文および総合討論の記録をご一読いただきたい。総合討論はありのまま採録することで，論議の内容が判るように努めた。内容を見て貰えれば判ると思うが，今後のレッドデータブックのあり方に関して多少でも参考になるものと確信している。この機会にこのシンポジウムを特集号として記録に残し，今後の地方版や全国版レッドデータブックの作成に役立てて頂きたいと思った次第である。今回の出版には，演者はもとより多くの方の協力があった。ここに感謝の意を表する次第である。なお，講演者氏名とシンポジウム当日における講演の題名を，下記枠内のシンポジウムメモに記す。

シンポジウムメモ

講演者と講演タイトル

1）千地万造：開催あいさつ
2）矢原徹一：レッドデータブックとは何か：絶滅の恐れの規準のあり方をめぐって
3）松井正文：レッドデータブックのあり方：全国版と地方版
4）梅原　徹：地方版レッドデータブックの意義
5）松本　勉：滋賀県の大切にすべき野生生物（2000年版）をまとめるにあたっての問題点
6）植田明浩：レッドデータブックの見直し状況と今後の課題
7）江崎保男：レッドデータブック地方版の今後のあり方についての提案